

所属情報の有無が障害者アートの評価に及ぼす影響について

加茂川 文

I. 問題と目的

近年、障害者が芸術活動に携わる機会を目にする機会が増えており、「障害者の芸術活動」に関する研究が進められている。

障害者の芸術活動が活発化するということは、その作品が評価される機会が増える。作品の評価について杉田（2012）は、「作品が評価されるということは、なんらかの変化をその人の生活にもたらすのではないだろうか。」と考察している。しかし、障害者の作品を評価することは、今に至るまで等閑視されており、その作品を評価する尺度は検討されたことがない。川上（2010）は、「障害者アートについては、既存のアートの立場からの議論として、障害者を取り巻く社会環境の改善をめざすというような福祉的な配慮が過剰なために、アートとしての正当な評価を阻害しているという主張がある。」と指摘した。

障害者の作品は、福祉施設や福祉をテーマにした報道など「障害者」にまつわる場での紹介が多いことから、バイアスのない「正当な評価」を受けられる機会が少ないと考えられる。

以上より本研究では、上記に関連して（1）障害者の作品にどのような印象をもっているのかを調査するために、障害者アートの評価をする尺度を作成すること、（2）作成した障害者アートの評価をするための尺度を用い、作品提示時に制作者の情報、すなわち「障害者の制作した作品」であるかの情報の有無によって作品の評価に差は認められるのかを検討することを目的とする。

II. 研究1

1. 研究目的

障害者アートの評価をするための尺度の作成することを目的とする。

2. 調査内容

質問紙を作成するにあたり、まずA大学教育学部教員養成課程の学生23名に、アートに関するアンケートと題して「障害者が作った絵や作品に対して、どのような絵を思い浮かべ、その絵にど

のようなイメージや特徴を持っていると考えるか」、「アーティストが作った絵や作品に対して、どのような絵を思い浮かべ、その絵にどのようなイメージや特徴を持っていると考えるか」の2つの質問に対し、自由記述式のアンケートを行った。

自由記述式のアンケートを実施した結果を基に、KJ法を用いて項目を「福祉的な視点」「芸術的な視点」に整理、統合を行った。それを基に、調査用紙「障害者アートに関するアンケート」の原案を作成した。回答は1から5の中で自分の考えに当てはまる数値に丸をつける形式をとった。

この調査用紙を用い、A大学の学生、教職員210名を対象に無記名式質問紙調査法を用い回答してもらった。その後A大学の学生、教職員210名に対する14の質問項目のうち、天井値と床値を除いた12の質問項目について、どのような因子構造になるかを検討するため、最尤法を用いて、プロマックス回転を行った。

2. 結果

因子数の決定は、固有値1以上の基準を設けて検討した。また因子パターンが0.35以下の項目については削除した。因子分析の結果7つの質問項目になり、3つの因子が抽出された。第1因子は「作品の魅力」、第2因子は「色彩」、第3因子は「非好印象さ」と名付けた。結果についてはTable1に示した。そこで解釈された因子を「作品の魅力」尺度、「色彩」の尺度、「非好印象さ」尺度とした。

この尺度をもとに、調査用紙「障害者アートに関するアンケート」の質問項目の並び替えを行い、質問紙「作品評価シート」を作成した。

III. 研究2

1. 研究目的

研究1において作成した障害者アートの評価をするための尺度を用い、作品提示時に制作者の情報の有無によって作品の評価に差は認められるか検討する。

2. 実験対象

Table1 障害者が作った絵や作品のイメージや特徴

質問項目	因子 1 作品の魅力	因子 2 色彩	因子 3 非行印象さ
第 1 因子：作品の魅力			
不思議な魅力がある	.955	-.005	.101
作品性が高いと感じる	.538	.022	-.131
制作者の努力が伝わってくる	.393	-.062	-.151
第 2 因子：色彩			
色の構成	.012	.935	.069
色の種類	-.044	.519	-.125
第 3 因子：非行印象さ			
幼稚に感じる	-.061	-.093	.593
適当に描かれている	-.050	.024	.473

因子抽出法：最尤法 回転法：Kaiser の正規化を伴うプロマックス回転

A大学の学生 109名(教育学部 学校教員養成課程 学校教育コース 特別支援教育専修 30名, 教育学部 49名, 他学部 28名, その他 2名)である。

3. 実験群・対照群の配置

本実験ではスライドAとスライドBの2種類の実験刺激を使用するため、被験者 109名をスライドAは 55名, スライドBは 54名にそれぞれ振り分けた。なお、本実験においてはスライドAが実験群, スライドBが対象群である。

その中で教育学部 学校教員養成課程 学校教

育コース 特別支援教育専修 30名については、「障害者」という言葉に反応しやすいと考えたため、スライドAとスライドBそれぞれにおいて 15名ずつ無作為に配置した。それ以外の被験者 79名については無作為割り付けを行った。

4. 実験刺激

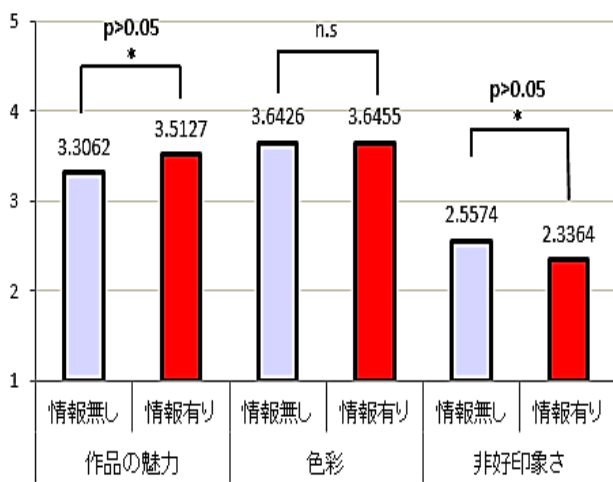
本実験では、作品の写真が載っているスライドを見て、質問紙「作品評価シート」に答えてもらう形式をとった。回答形式は研究1と同様である。



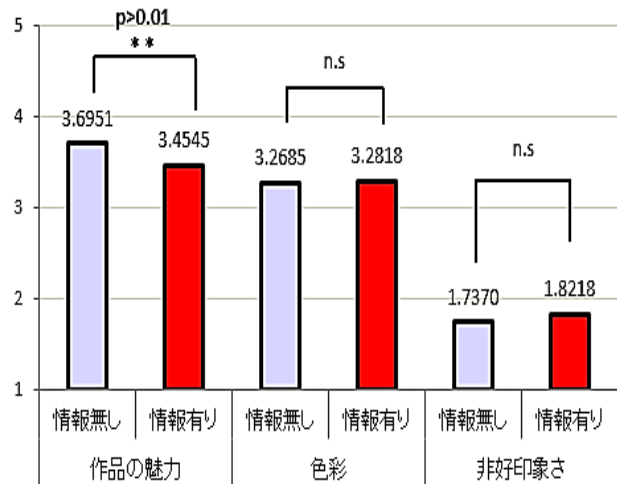
Fig.1 スライドA



Fig.2 スライドB



特別支援学校生徒の作品



美術科学生の作品

Fig.3 各因子の平均点の有意差

スライドは「制作者の情報が提示されているかいないか。」の2種類ある。

1種類目ではA大学 教育学部の美術科の学生の作品5枚については、「これはA大学 教育学部の美術科の学生の作品です。この作品を見て作品評価シート①に回答してください。」と提示した。また、A県立B特別支援学校の生徒の作品5枚については、「これはA県立B特別支援学校の生徒の作品です。作品評価シート②に回答してください。」と提示した。このような質問形式が作品10まで続く。これをスライドAと呼び、Fig.1に示す。

2種類目では、作品1の場合は「この作品を見て作品評価シート①に回答してください。」と提示した。このような質問形式が作品10まで続く。これをスライドBと呼び、Fig.2に示す。

作品を提示する順番は、美術家学生の作品と特別支援学校の生徒の作品はランダムだが、スライドAとスライドBで作品の順番は同じであった。

5. 分析方法

「A県立B特別支援学校の生徒の作品それぞれにおいて、制作者の情報がある場合とない場合では評価に差はあるか。」を分析するために、「第1因子：作品の魅力」、「第2因子：色彩」「第3因子：非好印象さ」の評価の平均において、t検定を行った。また今回の実験において、結果を検証するために比較対象を「美術科の学生の作品」として同様の手順で対照実験を行い、t検定を行った。これ以降「A大学 教育学部 美術科の作品」

を「美術科」、「A県立B特別支援学校の生徒の作品」を「特別支援学校」とし、情報は有無のみ明記する。

6. 結果

各因子と作品提示時の制作者の情報の有無との関連について、結果をfig.3に示した。

①「作品の魅力」について

「作品の魅力」尺度では、「特別支援学校・情報無し群」54人分、「特別支援学校・情報有り群」55人分の2群でt検定を行ったところ、「特別支援学校・情報有り群」の評価は有意に高いという結果になった($t = -2.1898$, $df = 107$, $p < 0.05$)。

同様に「美術科・情報無し群」54人分、「美術科・情報有り群」55人分の2群でt検定を行ったところ、「美術科・情報無し群」の評価は有意に高いという結果になった($t = 2.5808$, $df = 107$, $p < 0.01$)。

②「色彩」について

「色彩」尺度では、「特別支援学校・情報無し群」54人分、「特別支援学校・情報有り群」55人分の2群でt検定を行ったが、評価に有意な差はなかった($t = -0.0363$, $df = 107$, ns)。

同様に「美術科・情報無し群」54人分、「美術科・情報有り群」55人分の2群でt検定を行ったが、評価に有意な差はなかった($t = -0.1140$, $df = 107$, ns)

③「非好印象さ」について

「非好印象さ」尺度では、「特別支援学校・情

報無し群」54人分、「特別支援学校・情報有り群」55人分の2群でt検定を行ったところ、「特別支援学校・情報無し群」の方が評価は有意に高いという結果になった ($t=2.1740$, $df=107$, $p<0.05$)。

同様に「美術科・情報無し群」54人分、「美術科・情報有り群」55人分の2群でt検定を行ったが、評価に有意な差はなかった ($t=-0.8995$, $df=107$, ns)。

IV. 考察

研究1において障害者アートのイメージや特徴をまとめる際に、福祉的な視点と芸術的な視点の両者に当てはまる解答がいくつか見られた。このことを2つの理由から推測する。

1つ目は障害者アートが注目されるようになり、芸術作品として評価される機会が増えたことである。近年様々な障害者アートに関わる団体が活動している。そこでは障害者の作品を障害者の作品の枠組みではなく、一般の作品と一緒に展示をしている団体もある。

2つ目は一般的に障害者アートに直接触れる機会が少ないことである。一般的に障害者アートを目にする機会として、マスメディアや福祉施設で開催されている展覧会などが考えられる。マスメディアによる情報は障害者アートの一部でしかないことや、作品を目にする機会は未だ「障害者」に関わりがある場が多いことから一般的には広まっていないことが考えられる。このようなイメージの偏りから福祉的な視点と芸術的な視点を混同したことにより、障害者アートを芸術作品として評価することにつながったと推測する。

以上の2点から、障害者アートの多様性が身近なものとして世間的に広まることで、障害者のイメージも多様になると考えられる。

研究2から、特別支援学校の生徒の作品において、「作品の魅力」は作品提示時に制作者の情報が加わることで評価点が上がり、作品の印象が好転することが明らかになった。障害者アートについて自由記述式のアンケートでは、「一生懸命さや必死さが伝わる」、「心に訴えかける」という回答が

あった。これらのイメージが印象の好転に結びつくのではないかと推測する。また特別支援学校の生徒の作品において、「非好印象さ」は、作品提示時に制作者の情報が加わることで評価点が下がり、作品の印象が好転するのだろう。

一方美術科の学生の作品においては、「作品の魅力」は作品提示時に制作者の情報が加わることで評価点が下がり、作品の印象が悪化した。アーティストが作った絵や作品について、自由記述式のアンケートからは、芸術を専門としている人の作品には高いレベルが求められていることが考えられる。今回は、提示された作品が高い期待に沿わなかった可能性があるかと推測する。

これらのことから、「障害者の制作した作品」という情報に限らず、作者の情報の提示は「作品の魅力」の評価に影響を与えることが考えられる。

以上の「作品の魅力」と「非好印象さ」の結果から、「障害者の作品である」という情報が加わることで作品は肯定的な評価を得ることができると考えられる。このことから福祉的な側面による評価が助長され、障害者アートの評価は先入観が影響している可能性が推測される。

障害者の芸術活動は大切な余暇活動であり、障害者が社会に進出するきっかけの一つになる。その活動の評価が、参加している障害者の意欲や、活動を目にする人たちが持つ印象の変化につながるのではないかと考察する。

評価の機能と役割との関係も含め「正当な評価」とはどのような評価なのか、また評価の違いによって評価された人の心理的側面は変化するのかなども今後検討していきたい。

V. 引用文献

杉田穂子 (2012) アウトサイダー・アートが福祉の世界に投げかけるもの—ある受賞者のライフストーリーを通して—, 総合文化研究所年報 第20号, 81-84.

山田宗寛 (2010) アウトサイダー・アートに関する研究—美術と福祉の関係についての考察—, 筑波大学大学院教育学研究科論文集 第13号, 55-61.